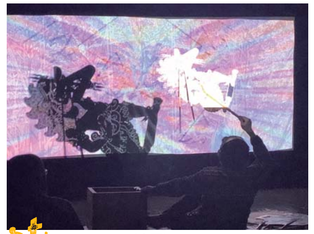
NPO法人**舞台アート工房・劇列車**（福岡県・久留米市）
『どんぐりと山猫というはなし』



CORONA（光環）（愛知県・名古屋市）
『デヴォ・ルチ』

魁士（神奈川県・川崎市）
『Dumbshow』

Report

P新人賞2022は劇列車『どんぐりと山猫というはなし』に決定

2023年2月19日・20日、P新人賞2022の最終候補3作品の上演会と公開選考会が開催されました。選考委員は小島祐未子、玉木暢子、智春、水谷イズル。コーディネーターは木村繁。

『デヴォ・ルチ』（CORONA（光環）、愛知県名古屋市）はインドネシアのワヤン影絵と映像とノイズ音楽の共演作品。デヴォ・ルチは神様の名前で、インドネシアの英雄が苦難のすえ、最後に内なる神、デヴォ・ルチに出会うという物語でした。技術的にはかなり洗練されたメンバーの組み合わせで、人形遣いが足をも巧みに使って演技する様は見ごたえのあるものでした。ただ電子音による抽象的な映像表現がメリハリなく続くので、観客は次第に感覚がマヒして内容が把握できないなど置いてきぼりになる作品でした。

こういったプロジェクションマッピングはドラッグ効果が強いだけに、うまくいけば神との出会いをテーマにしたこの作品で効果的かともいえるが、いろんな観客に向けて何を見せるのか、演出の力が欠けているのではないかとの指摘がありました。

『Dumbshow』（魁士、神奈川県川崎市）はマイムと笑いを組み立てた作品で、朝寝坊の男にかかってくる電話や宅配便をコミカルに描いた舞台でした。寝ている男と外の状況の関係に鋭さがなく、いくつかのマイムの技術を組み立てて見せている説明的なものを感じました。マイムに果たして道具は必要なのか、マイムの技術を見せたいのかコントをやりたいのかわからないという選評もありました。

『どんぐりと山猫というはなし』（特定非営利活動法人舞台アート工房・劇列車、福岡県久留米市）は宮沢賢治の童話を土台にして、それを演じる人形劇の集団を描いたディスカッションドラマでした。俳優たちの身体表現やセリフ術はよく訓練されていてとても気持ち良く見ることができました。一方、人形の操作については下半身＝足の操作が無神経だったり、人形劇として未完成なものを感じました。また、どんぐりたちの描写は人形の造形も含めてもっと楽しく愉快に演じられるはずなのに、ユーモアと遊び心が少なく、緊張感ばかりが目立ったとの指摘もありました。人形劇と外の世界を描く二重構造になっているのですが、演出家の決めた約束事ばかりで演じているので、どこか機械的で感情の見えない舞台との指摘もありました。ともあれ今日の子どもたちの実情に切り込んだ作品の強さが評価されました。

選考の結果、P新人賞2022には舞台アート工房・劇列車『どんぐりと山猫というはなし』が選ばれ、観客に支持された観客賞にはCORONA（光環）『デヴォ・ルチ』が選ばれました。

P新人賞2022実行委員長　木村繁

Report

P新人賞2020受賞記念公演劇団野らぼう『ロレンスの雲』に思った諸々のこと

『あの日から彼は私のことをしげると呼ぶようになった』でP新人賞、観客賞をダブル受賞した劇団野らぼう。この『ロレンスの雲』は『ロミオとジュリエット』の翻案であるが、世に数多あるモノとはかなり趣が違う。宇宙を旅する老夫婦を役者が演じ、古典の『ロミオとジュリエット』を人形が演じる。ヒトと人形、未来と過去が、強くて長い台詞とともに交錯する。劇団としては久しぶりの人形劇作品ということだが、受賞作同様、ヒトと人形と物語の関係に対しての作・演出の前田斜めのセンスは独特である。ビジュアルは緩い（でもキャッチで限られた照明に照らされ美しくすらある）のに、速いテンポで怒濤のように通り過ぎる台詞に置いていかれないように必死で、「で、結局何だったの？」と問われると何だか難しいのだが、不思議と観ていて気持ちいいのだ。

劇団はこの上演を、太陽光パネルとモバイルバッテリーを使い、日中に蓄えた電力を使用する「ゼロカーボン演劇」と謳っている（それはかりが前に出ている気もする）。野外公演主体の野らぼうの強みであるし、環境問題への演劇の試みとしては面白いが、「上演は天気次第」「途中で電力が尽きて会場が真っ暗になるかもしれない」という「約束できない」やり方に、観客は寛容であり続けるだろうか。私はへそ曲がりなので、太陽光パネルに関しては「作るのには多くの（炭素）エネルギーを使っているし、それを太陽光エネルギーで回収するには相当長くかかる」とか「（有害物質が多く含まれているが）廃棄のことまで考えているのかな？」とか「原材料は、世界シェア半分くらいは新疆ウイグル自治区で生産され、その過程には酷い人権侵害があって国際的な批判が高まっている（小池東京都知事はスルーしているけど）ことも知っているのかな？」とかも思ってしまう。

それでも、「やっている」ということが天晴れだし、そういう諸々も含めて、観客が「待っても観たい」という芝居を作り続けてくれることを期待しています。

愛知人形劇センター理事長　たかはしいちげん

パートごとの稽古に励む受講者たち

本番直前には円陣を組んで気合いを入れました！

終演後、緊張から解き放たれて記念撮影

Report

舞台制作に必要な技術と心構えを学んだ30日の集大成

昨年6月5日から全30回にもわたる講座が3月26日の成果発表公演を持って終了しました。

前期13名、後期11名（通し参加は9名）で開催。参加者は愛知、岐阜、長野、福岡と多地域から集まり、高校生から50代までと年齢幅も広く、職業・経歴も様々で学校の先生や高校生、声優学校に通う方、クラウン、某人形劇団の新入団員等々、今の活動の役に立てたい方から、今後、表現活動をしていきたい方など目標も多様。

前期ではそれぞれの講師のクラスを受講し、最終日には関係者向けに上演をしました。3チームにわかれ、脚本はクラスで書かれたものをベースに演じられ、それぞれの個性の違いや共通理解が見て取れて面白い。自分たちで作った仮面（これも全員が美術のカリキュラムで制作したもの）が随所に使われ、独特な世界観を醸し出し、短時間ではあったがモノの見え方、動かし方、身体の使い方を模索し、不慣れながら、可能性も感じました。ドラマの核を捉え、その表現も見たかったとのセンター理事からの言葉に、参加者はモノや身体に向き合うだけでなく、作品をどう表現するか、ということにも気付かされたように思います。

自分やモノと向き合って表現を探る内容が中心だった前期とは異なり、後期は有料の成果発表公演を目指しました。

「公演をする」とは、自分が何を表現するのか、だけでない、知っておかなければならない要素がたくさんあり、例えば、お金を支払っている観客を前にすること、専門的な舞台スタッフが関わること、場当たりやリハーサル、ゲネプロを経て本番を迎えるということ……、等々。公演までに向かうプロセス全てに意味があり、疎かにできない理由があることも伝えたい思いが、指導者から熱のある言葉となってクラスに響いていました。舞台の魅力や難しさ、怖さも伝えつつ、未来の舞台人のため、惜しみなく指導にあたる講師陣のこういった地道な育成、継承活動の先に、新しい観客や後継者、共演者も生まれてくるのだろうと思います。

アートラボ一期生として、今後の活躍にも期待したいところです。

愛知人形劇センター理事　Chang

Information

尾張・甚目寺の芸能を伝える「よみがえる源氏節」発刊

愛知人形劇センター元理事長の木村繁氏と甚目寺説教源氏節もくもく座から、「よみがえる源氏節」が発刊されました。愛知人形劇センター設立の契機ともなった「世界人形劇フェスティバル'88名古屋」に向けて、地元尾張の人形芝居として再創造された源氏節。木村氏とお母さん人形劇サークル「もくもく座」との出会い、そこからよみがえった甚目寺説教源氏節の全記録です。貴重な資料や写真、浄瑠璃台本も収録された、学術研究資料としての側面も持つこの冊子。興味のある方は、もくもく座、または愛知人形劇センター事務局までご連絡ください。

問合せ先　もくもく座▶jimokuji-genjibushi@ymail.ne.jp
愛知人形劇センター▶mail@aichi-puppet.net